

第1章・場面4 解説

辞書らしき本にはページ番号がついており、おかげで数字と自然数の体系がわかった。白石教授は老眼鏡を押し上げて、ふうと息を吐いた。

「どうやら基本的な数は理解できたな。十二進数になっているようだ。気をつけなばな」

情報工学の私は、博士に聞こえないように呟いた。

「基数の違いはそんなに困らないだろうな」

博士がこっちをちらっと見た気もしたが気にしない。それより、私の指先はキーボードの上を走り続けていた。次々に文字列とイラストをAIに入力して学習させる。だが、言語体系を理解するにはまだまだ時間がかかるだろう。

夜を徹しての作業が数日続いた。研究室の空気は熱気と疲労がごちゃまぜだ。研究者たちは時に言い争い、時に机に突っ伏した。だが私は、眠気よりも好奇心に突き動かされていた。

「白石先生、ここ。“太陽”のイラストが、この記号と一致しているかもしれません」

「ふむ.....なるほど。では、この記号が“地球”だとしたら.....」

私と教授は、まるで言葉遊びをする子供のように仮説をぶつけ合った。

突破口は意外なところから訪れた。辞書の後半に記されていた数列に目を通していた白石教授が、小さく声を上げた。

「.....十二進数で表された円周率だ」

私は慌てて円周率を十二進数に変換してみる。確かに、その数字列がそのまま紙面に刻まれていた。周囲の記載を追う。思わず独り言が口に出ていた。

「この記号が掛算や累乗を示す記号だとしたら、この単語は『面積』？」

単語を辞書から探すと、円の面積を表していそうなイラストが載っていた。

「これだ.....！」

数学は宇宙で共通はなず。ここから一部の記号と意味を対応させられる。夢中で他の数式と単語を対応付けしていく。また、この「面積」の文字を、端末の画面でなぞってみ

る。

「タッチパネルだったら、何か反応があるんじゃないか……」

期待通り、端末の画面には辞書と同じ内容が表示され、しかもその単語と説明と思われる音声が出てきた。この文章が円の面積の求め方を説明しているとしたら……？ 文章中の文字を一つ一つ指でなぞるたびに、それぞれの単語の説明が画面に現れる。

「よしッ……！」

思わずガッツポーズがでた。周囲の研究者たちが一斉にこちらを見た。ようやく糸がほぐれてきたのを実感する。端末、辞書、それにAIを駆使して、翻訳の手がかりを積み上げていった。

数日後——。化粧の手間も惜しんですっぴんの私と白石教授が、手紙の解析を手掛けていく。

「……手紙のこの単語、“祈る”って意味じゃないですか？」

「いや、“願う”だろう」

「でも、この接辞がつくと“航海の無事を祈る”という文になるんです！」

それから半日あまりが過ぎた後、断片的に文がつながり、そしてついに手紙の全文が浮かび上がった。思わず背中がぞくとした。

手紙には、こう記されていた。

温暖化を食い止め、地球を存続させたいければ、モアブ衛星ジッテまで来なさい。
ジッテへの航路は添付資料を見なさい。
ただし、ジッテまでは4光年あり、あなた方の技術では到達まで時間がかかり過ぎるでしょう。
添付資料に、宇宙用核融合推進エンジンの図面を入れておくので、活用をお勧めします。
航海の無事を祈っています。

読み上げた瞬間、研究室にどよめきが広がった。歓声を上げる者、椅子に崩れ落ちる者。私は鳥肌がしばらく収まらず、何度も手紙を目で追った。

ニュースはすぐに世界へ広まった。街頭の大型スクリーンにも、ビジュアにも同時に配信される。

ニューヨークの市民は歓声を上げ、涙を流して抱き合った。だが、パリでは「毘だ」と叫ぶデモが発生した。東京では人々が空を見上げ、ざわめきの中で誰かが「希望だ」と口にした。

SNSには「救世主だ『侵略の前触れだ』と相反する言葉が並び、世界は割れた。それでも、人々が同じ一点に目を向けたのは確かだった。

私は研究室の片隅のソファに身体を投げ出し、深く息を吐いた。体は重く、頭は霞んでいたが、胸の内には熱が残っていた。

「.....やったんだ」

小さく呟く。白石教授が隣に立ち、珍しく笑みを浮かべた。

「飯塚君、君の気づきが大きかったな。世界は今、君が翻訳した言葉で動いている」

頬が熱くなった。だが誇りよりも、責任の方が重くのしかかっていた。

未知の存在からの“招待状”。その意味を、世界中の人々がどう受け止めるか。そこに人類の未来がかかっている。

歓喜に沸き立ち、あるいは放心した仲間たちを見ながら、私は心に決めた。

——まだ始まりにすぎない。

ジッテへ行く船が造られる。私も関わるだろう。

希望と不安を背負って。

胸に広がる達成感は、次の挑戦への決意へと変わっていった。